

世界を視野に入れた中学歴史学習

－ 江戸時代の学習を事例として －

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

篠塚 明彦

世界を視野に入れた中学歴史学習

－ 江戸時代の学習を事例として －

筑波大学附属駒場中・高等学校 社会科

篠塚 明彦

要約

生徒たちの多くは、江戸時代は世界との関わりがもっとも薄れたものと思っている。そこで江戸時代の学習を通して、世界と日本との関わりを意識させることを目指して、授業内容の開発に取り組んだ。主に、「鎖国」政策とヨーロッパ諸国の覇権争いとの関わり、江戸の社会の変革とアイヌ交易（北方交易）との関わりという点を中心に据えて学習を進めた。授業後の感想からは「鎖国」といわれる状況であっても、決して世界と隔絶して動いていたのではなく、世界史と日本史が結びついて動いているということを捉えていることが伺える。世界と切り離されたと思われがちな「鎖国」である。それだけに、世界を意識しながら江戸時代学習を進めることは、日本の存在を相対化しながら世界全体を捉える視点を養う上で特に有効であろうと考える。

キーワード：世界認識、「鎖国」、オランダ、アイヌ交易

1 中学生の世界認識の現状

現在、中学生の世界認識は著しく偏ったものとなっている。昨年、中学入学から間もない頃の中学1年生の生徒たちにメンタルマップを描いてもらった。本校（筑波大学附属駒場中学校）に入学してくる生徒たちは、いわゆる「受験エリート」と言えるであろう。さすがに「受験エリート」の中学1年生だけに、おそらくは多くの中学1年生よりもよく描けているものと思われる。しかしながら、予想していた通りに、東南アジアやアフリカ、中南米などの描き方はお粗末なものがほとんどであった。一方で全体の傾向として、日本については比較的詳しく、かつ大きめに描かれているものが多かった。ここに生徒たちの世界認識の有り様をうかがい知ることができるのではないだろうか（後掲資料参照）。つまり、日本のことばかりが強調され、世界の中の日本という意識、日本を世界の中に位置づけて考えようとする意識の希薄さが現れている。

生徒たちの入学までの社会科学習は、受験を強く意識し、教科書や学習指導要領に忠実に乗っ取ったものであるといえる。いわば、教科書・学習指導要領に忠実に乗っ取った社会科の学習を真面目に、一生懸命取り組んだ「成果」が彼らの世界認識に反映されている

といえるだろう。さらに、教育基本法の改定にともない、今後、「愛国心」の強調や、さらに一層日本中心に学習を進めるような社会科の学習内容の改変が求められることも考えられる。その結果、今以上に日本中心の独善的な世界認識を助長することにもなりかねない。そのような状況を考慮すると、中学校における社会科や歴史の学習では大いに世界を意識することの必要性があると考えられる。

ところで、私は2006年度の本校教育研究会の公開授業において、世界との関わりを意識するという視点から、「モンゴルの日本遠征」を取り上げた（注1）。授業後の研究協議会において、参加された方から「鎌倉など中世は、世界との関わりを意識した授業内容が比較的構成しやすいのではないか。江戸時代などはどうするのか。」との御指摘を頂いた。これはもっともなご指摘であろう。江戸時代の世界との関わりといえば、いわゆる「鎖国」の問題がすぐに想起されよう。生徒たちの江戸時代についての認識にも「鎖国」は大きく関わっているものと思われる。「鎖国」ということばによって、世界との関わりが薄れたと思われる江戸時代であっても、けっして世界との関わりを抜きには考えられない。このことを考えることで、生徒に世界と日本との関連に目を向けさせることができるのではな

いかと考え、授業内容の開発に取り組んだ。

2 学習内容構成の視点

それでは、中学生が世界との関わりを意識できるようにするためにはどのように学習内容を構成すればよいのだろうか。単に世界のことを授業で触れるだけでは、生徒たちが世界との関わりを意識することは難しいであろう。生徒たちには、世界と日本が常に関わりながら歴史が動いてきたということを、実感を持って考えるようになってほしい。

「日本の歴史は、日本だけの歴史で成立しているのではない。日本史はつねに世界史のなかで動いてきた。同時に日本史は世界史をささえている。世界史が日本史をつくり、日本史が世界史をつくる。世界史と日本史は、別々のものではない。世界史をはなれて日本史はなく、日本史をのぞいて世界史はなりたない。」これは、鈴木亮著『ファミリー版世界と日本の歴史1 原始 文明の誕生』の冒頭「読者のみなさんへ」と題して編集委員会によって書かれた文章の一節である（注2）。この文章は、中学生・高校生が歴史学習をする上での意識すべき重要な視点を示してくれている。先に述べたような日本ばかりが強く意識された中学生たちの世界認識を変えていく上でも重要な視点であろう。そこで、この視点を意識しつつ、江戸時代の学習内容を構成した。但し、実際に授業を進めるなかでは、全体の時間数に制約があるので具体的には、江戸時代という単元を学習するなかで、次の二つの点に絞って世界との関わりを考えることにした。

- i) そもそも「鎖国」というのは、江戸幕府の事情のみで行われたものではなく、世界的な状況の変化と大いに関わりながらとられた政策であるという点。
- ii) 「鎖国下」であっても外国との結びつき、関わりはあった。それはいわゆる「四つの口」を通して交易や交流を行っていたというようなレベルのものではなく、江戸時代の社会の変化にも関わるようなものであったという点。

やむを得ないことではあるが、現行の教科書においては、「鎖国」に至る経緯やヨーロッパの中でオランダのみが残ったことについてキリスト教との関係などが述べられているに留まり、ヨーロッパや世界の動きとの関わりが見えてこない記述となっている。また、同様に「鎖国下」の対外関係についても長崎、対馬、

琉球、松前といういわゆる「四つの口」における交易や交流については記述されているが、それが日本の社会や人々の生活にどのように関わったのかということについてはまでは記述されていない（注3）。

3 江戸時代（幕府成立～天保の改革）学習

の全体構成

江戸幕府の成立から天保改革期までを以下に示すようなテーマで全9時間を設定し、授業を展開することにした。

- ① 江戸幕府の成立
幕府による大名統制の仕組み、幕府の基礎の確立
- ② 江戸の武士・町人・農民
城下町としての江戸の成り立ちと身分制の確立
- ③ 「鎖国」への道
江戸初期の外交、朱印船貿易から「鎖国」政策への移行
- ④ なぜオランダが残ったのか
17世紀ヨーロッパ諸国の状況と「鎖国」の関わり
- ⑤ 松前藩とアイヌの人々
「鎖国」下の北方交易と松前藩によるアイヌからの収奪
- ⑥ 産業・交通の発展
生産力向上の背景・金肥等の使用とそれに伴う社会の変化
- ⑦ 増える百姓一揆
商品作物生産の増加と農村の変化、貨幣経済の浸透
- ⑧ 幕府による改革
享保の改革・田沼時代・寛永の改革
- ⑨ 揺れる江戸幕府
商人・豪農の成長、外国船の来航、天保の改革

ここまでの学習をした後、イギリス産業革命・フランス革命を中心としたヨーロッパの動き及びヨーロッパ諸国によるアジア進出（インド大反乱・アヘン戦争）を学習し、開国・明治維新へと移った。

4 個別の授業内容

先に述べた i) の点（そもそも「鎖国」というのは、江戸幕府の事情のみで行われたものではなく、ヨーロッパにおける覇権争いという世界的な状況の変化と

大いに関わりながらとられた政策である。)については全体構成の③・④の授業に関わる。同様に ii) の点(「鎖国下」であっても外国との結びつき、関わりはあった。それはいわゆる「四つの口」を通して交易や交流を行っていたというようなレベルのものではなく、江戸時代の社会の変化にも関わるような大きなものであった。)については全体構成の⑤・⑥の授業に関わる。そこで、次にそれらの授業の具体的な内容について示しておくことにする。

4.1 「鎖国」への道とオランダの覇権確立

【「鎖国」への道—江戸初期の外交政策—】

◇アンボイナ事件

- 1623年 アンボイナ事件がおこる
 - モルッカ諸島(香辛料諸島)のアンボイナ(アンボン)島でおこったオランダ商館員による、イギリス商館員虐殺事件
 - 9名の日本人が犠牲となる
 - (→16世紀末～17世紀初日本人が東南アジア各地に居住)

*アンボイナ事件に日本人が関わっていたことを通して、17世紀初に日本人が東南アジアに居住していたことを確認する。

◇東南アジアに進出する日本人

- 朱印船貿易
 - 東南アジア各地に「日本町」形成される
 - 担い手…博多・堺の大商人、九州など西国の大名
 - 朱印船貿易の貿易品
 - 輸出(日本から外国へ):
 - 銀、銅、漆器、工芸品など
 - 輸入(外国から日本へ):
 - 生糸、絹織物、毛織物など

*日本人居住の背景としての朱印船貿易の存在と担い手を確認する。

◇「鎖国」へ

- 1616年 中国(明)以外の船の入港を長崎・平戸に限定
- 1623年 イギリスが平戸商館を閉鎖
- 1624年 イスパニア(スペイン)との国交を断絶、来航を禁止
- 1631年 奉書船制度の開始、朱印状以外に老中の奉書が必要となる
- 1633年 奉書船以外の渡航禁止、海外に5年以上

居留する日本人の帰国禁止

- 1635年 中国・オランダなど外国船の入港を長崎のみに限定、日本人の渡航と帰国の禁止
- 1639年 「鎖国令」
 - キリスト教布教禁止、ポルトガル船来航禁止
- 1641年 オランダ商館出島へ

*いわゆる「鎖国」へ至る過程を確認する。

◇幕府はなぜ「鎖国」をしたのか?

貿易利益の独占

(西国大名が貿易で得ていた利益をおさえる)

宗門改め

→キリスト教禁止、人々を寺に所属させ統制する

*「鎖国」をするに至った幕府側の理由を確認する。

【なぜオランダが残ったのか—「鎖国」とヨーロッパ諸国の状況】

◇オランダの独立

- 1581年 オランダ(ネーデルランド共和国)の独立宣言(スペインから独立を目指す)
- スペイン王フェリペ2世(カトリック)
 - ネーデルランドに重税
 - 大商人(プロテスタント)の反発、独立戦争へ
- 1588年 アルマダ海戦
- イギリス→オランダ支援
- イギリス海軍がスペイン無敵艦隊を破る

*なぜ、オランダが残ったのかを考える前提として、独立の様子について確認する。

*オランダ独立戦争・アルマダ海戦が覇権を握っていたイスパニアに打撃を与えていたことを確認する。

◇ヨーロッパ諸国の状況

- ポルトガル…スペインによる占領(1580～1640年)
- スペイン…オランダ独立戦争で敗北
- イギリス…アンボイナ事件(1623年)で東アジア貿易から追い出される

*東アジア交易におけるオランダのライバル国の状況を確認する。

*アンボイナ事件と平戸のイギリス商館閉鎖の関係を確認する。

“17世紀はオランダの世紀”

「オランダ人は蜜蜂のようにすべての国から汁を吸い上げる。ノルウェーは彼らの森林であり、ライン河、ガロンヌ河、ドルドーニュ河の河畔は彼らのぶどう園、ドイツ、スペイン、アイルランドは彼らの羊の牧場、ペルシア、ポーランドは彼らの穀倉、インド、アラビアは彼らの庭園」

アムステルダム→17世紀にヨーロッパにおける金融・商業の中心に成長

*17世紀当時オランダ商人の活躍について述べた文章を通して、「17世紀＝オランダの世紀」であったことを確認する。

◇オランダと日本

1600年 リーフデ号到達

ヤン＝ヨーステンが家康の外交顧問となる

1609年 平戸にオランダ商館開設

*オランダと日本との関わりを確認しまとめとする。

4.2 北方交易と江戸社会の変化

【松前藩とアイヌの人々】

◇雲竜紋の錦織（絹織物）

雲竜紋の錦織…江戸時代に歌舞伎の衣装、帯、陣羽織、僧侶の袈裟などに広く利用

*もとは中国（清）で作られた豪華な絹織物

「蝦夷錦」と呼ばれる

「蝦夷錦」の来たルート

北京→アムール川下流域→サハリン→北海道

（アイヌ）→松前→江戸・大坂・京

*蝦夷錦を題材に北方交易について目を向ける。

◇カムチャツカ半島の「寛永通宝」

20世紀初 カムチャツカ半島南部の遺跡から「寛永通宝」が発見される

→北海道（アイヌ）と千島列島・カムチャツカ半島の人びととの交易が存在

*カムチャツカ半島から寛永通宝が出土したことから、この方面の交易にも目を向ける。

◇松前藩とアイヌの人々

松前藩からアイヌへ：米・酒・木綿・鉄 など

アイヌから松前藩へ：鯨・鮭・鯨・ラッコ皮・蝦夷

錦 など

*アイヌの人々と松前藩の交易の様子について確認する。

◇アイヌの抵抗

1669年 シャクシャインの戦い

松前藩の不公正な取引、金採掘による生活圏の破壊を原因にした抵抗、蝦夷地の広範囲に及ぶ

1789年 クナシリ・メナシの戦い

和人商人の横暴に反発、北海道東部と国後島のアイヌが蜂起、一部のアイヌ首長の裏切りと松前藩の武力により鎮圧

*松前藩のアイヌに対する対応は厳しいものであり、それに対するアイヌの人々の抵抗の様子を確認する。

◇松前藩の蝦夷地支配

商場知行制 → 場所請負制度

（商人に支配を委ねる、アイヌに対する収奪が激しくなる）

松前藩…アイヌの人々を利用して北方や中国の物産を入手

*抵抗を抑えた松前藩がアイヌの人々との交易の主導権を握り、さらに利益をあげたことを確認する。

【産業の発展】

◇蝦夷錦を着た松本幸四郎

松本幸四郎の芝居（＝歌舞伎）を見た人びとは？

町人・富裕農民

→経済的成長、芝居など楽しむ経済的余裕

江戸時代…町人文化の発達

*蝦夷錦を身にまとった松本幸四郎の絵を題材に、歌舞伎などの町人文化の発達とその背景を確認する。

◇経済成長の背景としての生産力の向上

どのようにして農業生産量を増やすか？

①新田開発・耕地拡大（17世紀）

排水、灌漑（用水路）

②農業技術高める

農具の発達

金肥（購入肥料）の使用→干鰯、粕、鯨油など

*町人・富裕農民の経済的成長の背景にも結びつく生産性の向上のあり方を考える。

◇生産力の向上に関わる変化

海上輸送の発達→西廻り航路（北前船）、東廻り航路
農村の変化

→商品作物生産（木綿・藍・菜種など）の増加
貨幣経済が浸透

*生産力の向上が商品作物生産の増加をもたらし、貨幣経済の浸透や運輸の発達といった社会の変化に繋がっていくことを確認する。

◇金肥使用の背景にあったもの

松前藩…アイヌの人々によって穫られた鮭・鯡・鯨
をもとに金肥（購入肥料）を生産し全国に
流通させる

*商品作物生産に欠くことのできない干鰯や
鰯粕などの金肥が鰯だけでなく、鮭や鯡をもと
に作られ、房総や三陸などばかりでなく、松前
藩を通して全国にもたらされたことを確認
し、商品作物生産とアイヌ交易の関わりを考
える。

5 授業後の生徒の声

1学期末の段階（フランス革命まで学習した段階）において生徒たちに書いてもらった感想の中から、いくつかを紹介したい。全3クラス（各41名）で感想をきいたが、どのクラスも同様の傾向があるので、任意の1クラスの中から約半数の生徒の感想を取りあげることとする。

- ・オランダと交流したのは、キリスト教を布教しないからだと思っていた。
- ・鎖国というのは、キリスト教の排除だけでなく貿易利益の独占ということもあるのだなと思った。
- ・アイヌと交易していたことは知っていたが、松本幸四郎の着物が伝ったり、寛永通宝がロシア領までいって驚いた。
- ・金肥をはじめとする江戸の人々の暮らしを変化させたものが、貿易を通じて入っていることがわかった。
- ・受験のときは、鎖国と言えば他の国と全く関わらないと考えていたが、アイヌとの交易は思った以上に

に盛んだった。

・鎖国とは限られた国としか国交がなくほぼ完全に閉ざした状態だと思っていたが、国交は限られた国としかなかったが、アイヌ等が関わった物の流れは結構あったのだと思った。

・アイヌと松前藩が交易していたことは知っていたが、どのようなものだったのか具体的にわかった。

・干鰯や鰯粕がアイヌからも沢山もたらされていることを知って面白かった。

・四つの窓での交易やアイヌからの収奪で農民や町人の生活の向上などがあり、外界から様々な影響を受けており、鎖国はそれほど強固なものではないなと思った。

・他と交流しており、鎖国というのは微妙な状態だと思う。むしろ、幕末に鎖国が意識されたのだなと思った。

・鎖国は日本国内の事情だけで実施されていると思っていたが、実はヨーロッパの勢力関係も関わっているのだなと知って驚いた。

・鎖国にオランダと他の欧州の国々の関係が関わっているということを知って面白かった。今回は、歴史は世界全体でつながっているということ意識できた。

・鎖国中でも、アイヌなどを通じて輸入した物が民衆文化に影響していたりして、鎖国って実は地球の歴史に大きな関わりがあると感じた。

・「日本史」として鎖国を捉えていたため、幕府の都合で行っていたと思ったが、今は「世界史」としても鎖国を捉えられるようになった。

・鎖国に世界情勢が関係していたということで、日本の歴史も世界史だと思った。日本史と世界史を分ける必要もないし、簡単に分けてはならないと感じた。

・外国を勝手に日本が受け付けなくなったのかと思っていたが、そのときの色々な国の問題が関わっていて、鎖国は必然的に起こったのではないかと思うようになった。

・ヨーロッパで外交をする気力が残っていたのはオランダだけということがわかって、鎖国というのは日本がやったものでなく、不可抗力だったのかもしれないと思った。

・今回の授業では琉球との貿易のことを触れなかったので不思議に思った。

・鎖国によって浮世絵など日本の伝統文化が生まれた。もし鎖国がなければアメリカのような文化も何

もない国になっていたので鎖国賛成。

・江戸時代に他の国と様々な交流をしていたことがわかった。しかし、貿易を制限していたことにかわりはなくやはり鎖国とよんでもよいと思う。

6 生徒の認識の変化

幕末になって、オランダ以外の欧米諸国が姿を見せ、幕府がその対応に追われるという状況のなかで、生徒の中に「オランダはどうしたのか」「ヨーロッパで何か状況が変化したのか」といったことに意識を向けるものが出てきた。17～19世紀初頭にかけて、ヨーロッパではオランダからイングランドへと覇権は移行し、また資本主義が発展しはじめていた。詳しい状況はわからないまでも、ヨーロッパや世界で何かが変わりつつあり、その変化が幕府の政策にも影響を及ぼしていくということを意識しはじめていったのである。これは、江戸時代学習の前半においてオランダを中心としたヨーロッパの動きを学習した結果といえよう。生徒のヨーロッパにおける変化への気づきは、産業革命・フランス革命から資本主義ヨーロッパによるアジア進出という事項を学習する上での理解を助けることが期待できよう。

また、先に示したように「鎖国中であっても、アイヌなどを通じて輸入した物が民衆文化に影響しているなど、鎖国は実は地球の歴史に大きな関わりがあると感じた。」や「鎖国にオランダと他の欧州の国々の関係が関わっているということを知って面白かった。今回は、歴史は世界全体でつながっているということを意識できた。」という感想を書いた生徒がいた。ここからは、「鎖国」といわれる状況であっても、決して世界と隔絶して動いていたのではなく、世界史と日本史が結びついて動いているということを実感をもって捉えていることが伺える。全ての生徒というわけにはいかないが、一定程度の割合で生徒たちは、世界と日本が常に関わりながら歴史は動いてきたという認識を持つようになってきたと評価している。

世界と切り離されたと思われがちな「鎖国」である。それだけに、世界を意識しながら江戸時代学習を進めることは、日本の存在を相対化しながら世界全体を捉える視点を養う上で特に有効であろうと考える。

【注】

- 1) この授業は、歴史教育者協議会（日本）・全国歴史教師の会（韓国）編『向かい合う日本と韓国・朝鮮の歴史 前近代編・上』（青木書店）2006所収の拙稿「東アジアのなかのモンゴル」をもととしたものである。
- 2) 鈴木亮『ファミリー版世界と日本の歴史1 原始 文明の誕生』（大月書店）1987 P.3～4 なお、このシリーズの編集委員は大江一道氏、鈴木亮氏、浜林正夫氏、宮原武夫氏の四氏である。
- 3) 例えば、最も採択数の多い東京書籍の場合には次のように記述されている。

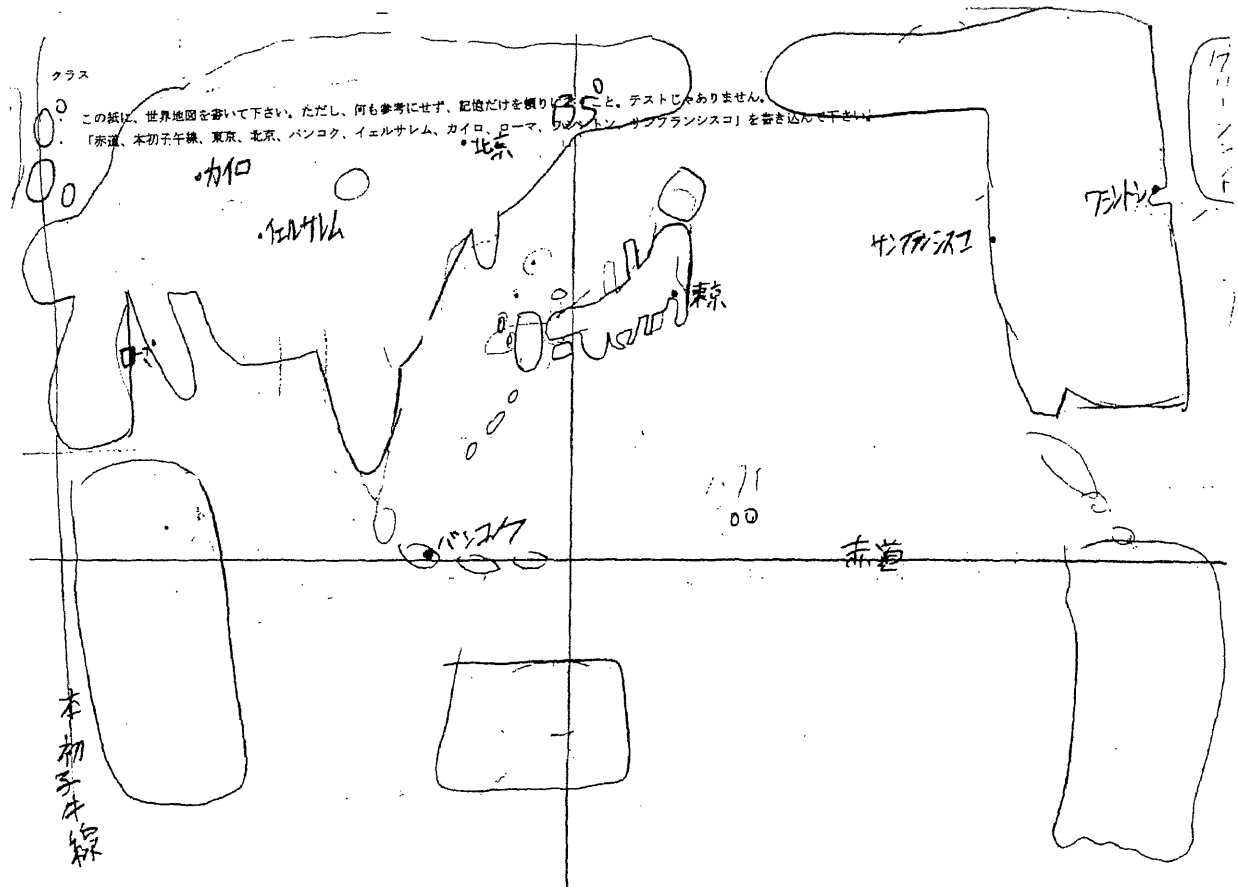
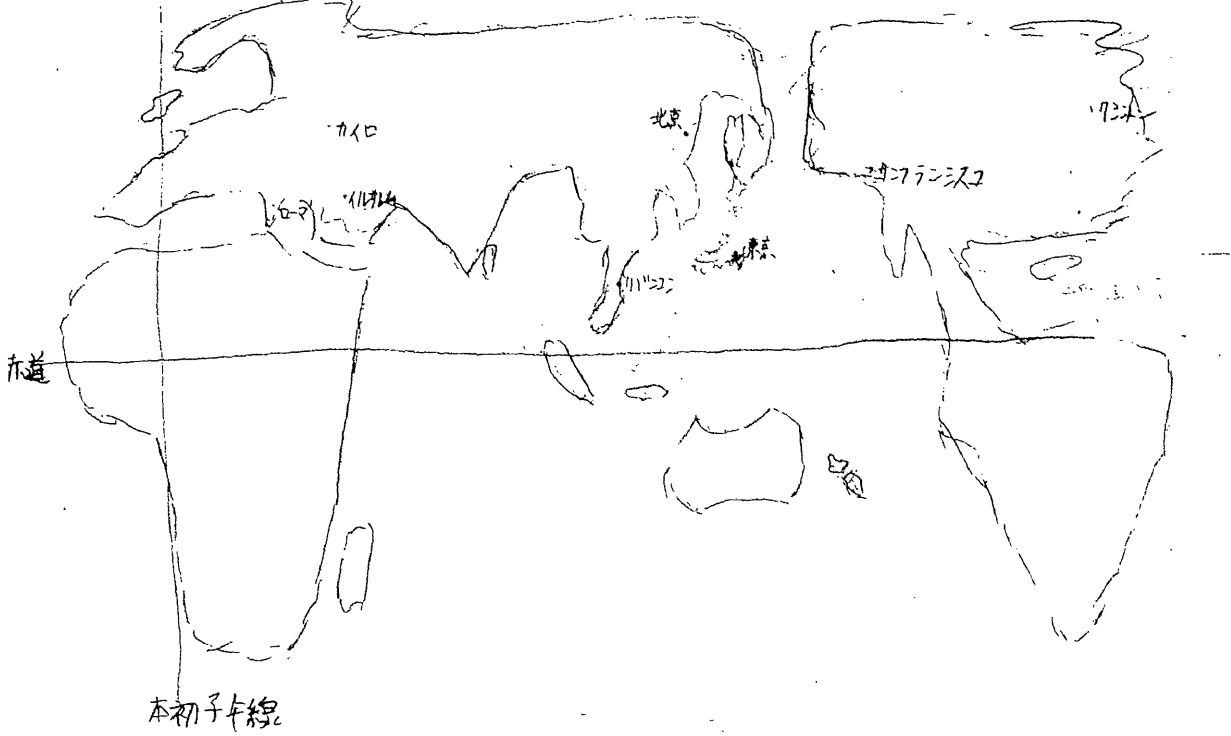
「キリスト教徒への迫害や領土の圧政に苦しんだ島原（長崎県）や天草（熊本県）の人々は、1637年、天草（益田）四郎という16歳の少年を大将にして一揆を起こしました（島原・天草一揆）。これにおどろいた幕府は、多くの軍勢を派遣してこれを鎮圧し、1639年にはポルトガル船の来航を禁止し、沿岸の警備に努めました。また、1641年には、平戸にあったオランダ商館は長崎の出島へ移され、中国船とオランダ船が、長崎に限って貿易を許されることになりました。このような幕府による禁教、貿易統制、外交独占の体制を鎖国とよんでいます。」

【参考文献】

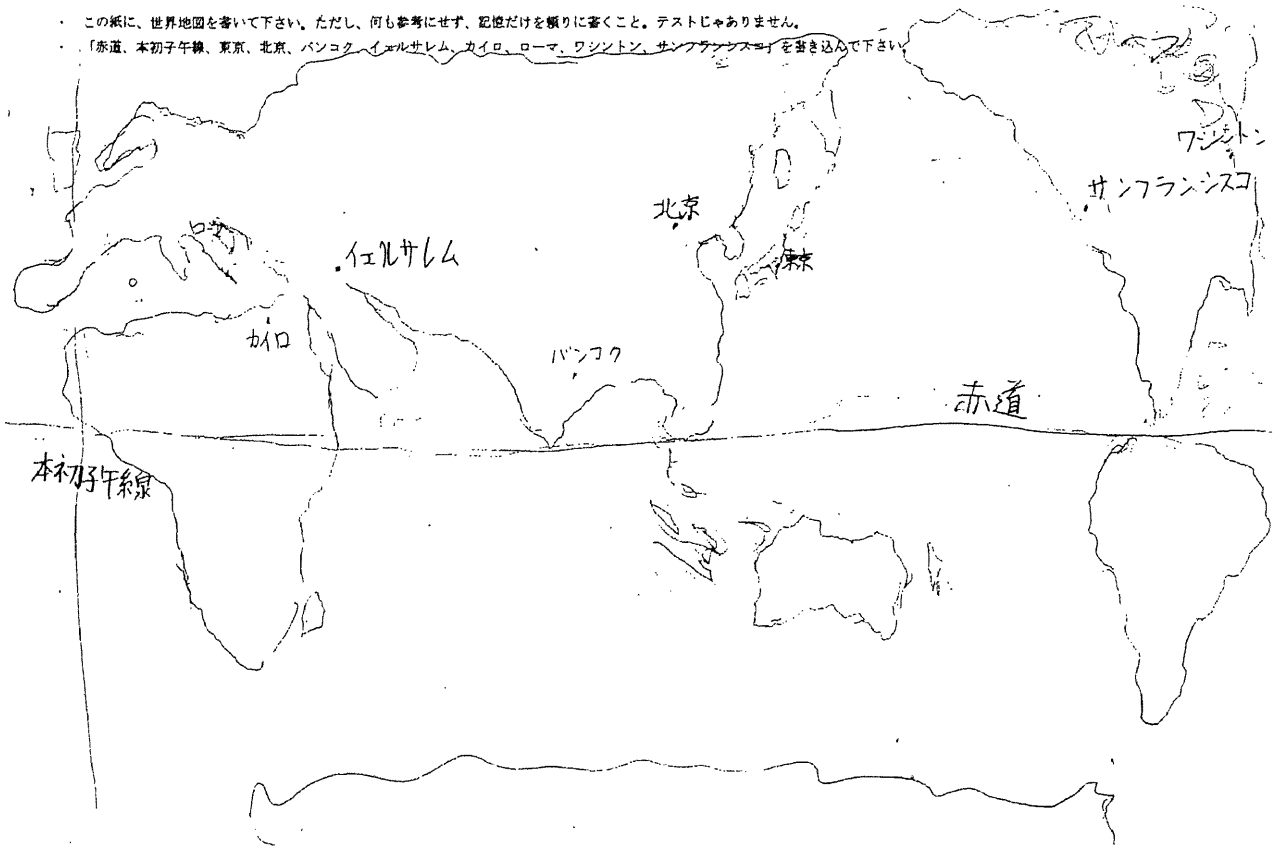
1. 山脇悌二郎『長崎オランダ商館』（中公新書）1980
2. 大橋康二・坂井隆『アジアの海と伊万里』（新人物往来社）1994
3. 河野實『日本の中のオランダを歩く』（彩流社）1999
4. 深谷克巳『日本の歴史 6、江戸時代』（岩波ジュニア新書）2000
5. 藤田覚『日本史リブレット 48、近世三大改革』（山川出版社）2002
6. 千葉県歴教協日本支部会編『絵画史料を読む日本史の授業』（国土社）1993
7. 加藤公明『考える日本史授業 2』（地歴社）1995
8. 菊地俊彦『北東アジア古代文化の研究』（北海道大学図書刊行会）1995
9. 榎森進『アイヌ民族の歴史』（草風館）2007
10. 佐々木史郎『北方から来た交易民』（日本放送出版協会）1996
11. 菊地勇夫編『日本の時代史 19、蝦夷島と北方世界』（吉川弘文館）2003

【資料】中学1年生の描いたメンタルマップの一例

この紙に、世界地図を書いて下さい。ただし、何も参考にせず、記憶だけを頼りに書くこと。テストじゃありません。
 「赤道、本初子午線、東京、北京、バンコク、イエルサレム、カイロ、ローマ、ワシントン、サンフランシスコ」を書き込んで下さい。



- ・ この紙に、世界地図を書いて下さい。ただし、何も参考にせず、記憶だけを頼りに書くこと。テストじゃありません。
- ・ 「赤道、本初子午線、東京、北京、バンコク、イエルサレム、カイロ、ローマ、ワシントン、サンフランシスコ」を書き込んで下さい。



- ・ この紙に、世界地図を書いて下さい。ただし、何も参考にせず、記憶だけを頼りに書くこと。テストじゃありません。
- ・ 「赤道、本初子午線、東京、北京、バンコク、イエルサレム、カイロ、ローマ、ワシントン、サンフランシスコ」を書き込んで下さい。

